

琵琶湖定点定期観測

鈴木 隆夫・中嶋 拓郎・森田 尚・金辻 宏明・岡村 貴司

1. 目的

琵琶湖の漁場環境の動向を把握するため、大正4年(1915年)から水象と水質の定期観測を実施している。

2. 方法

平成26年(2014年)4月から同27年(2015年)3月までの毎月1回、彦根港と安曇川河口の舟木崎を結んだ直線上に設けた5定点(Stn. I~V、図1参照)で、水温、透明度、プランクトン沈殿量、溶存酸素(DO)濃度、栄養塩濃度等の測定を行った(詳細については、資料編を参照)。

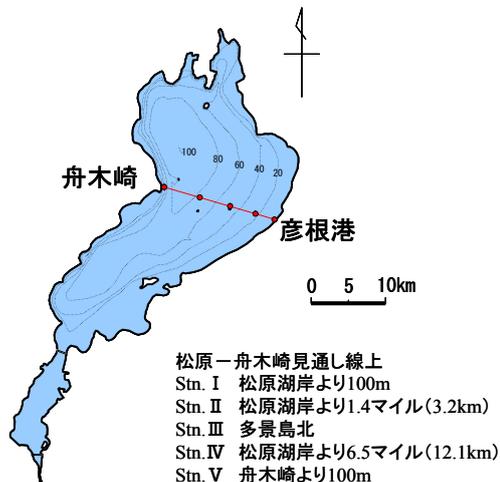


図1 調査地点

3. 結果

水温は、5定点の表層(水深0.5m)の平均値を見ると、6、7月と3月で平年値(1981年~2010年の平均値)を上回った以外、0.3~1.3℃下回った(図2)。

透明度は、5定点の平均値を見ると3.9~8.3mの範囲にあり、6月は平年値5.4mを2.9m上回った。一方で、10月は調査3日前に通過した台風19号の影響により、平年値を1.6m下回った。全体的には、12か月のうち8ヶ月で平年値を上回っており、年間平均値も平年値を0.3m上回っていた。

プランクトン沈殿量は5定点の表層(0~10m)平均値を見ると1.31~32.19ml/m³の範囲にあり、5月、7月はともに平年値の2倍程度の約30ml/m³であった。しかし、全体的には、12ヶ月のうち8ヶ月は平年値を下回った。

DO濃度は、Stn. IV底層(水深約80m)では4.57~11.04mg/lの範囲にあり、全体的な変化傾向はほぼ平年通りであったが、12月の寒波により平年より約1ヶ月早く、1月に酸素濃度が高いレベルにまで回復した。(図3)

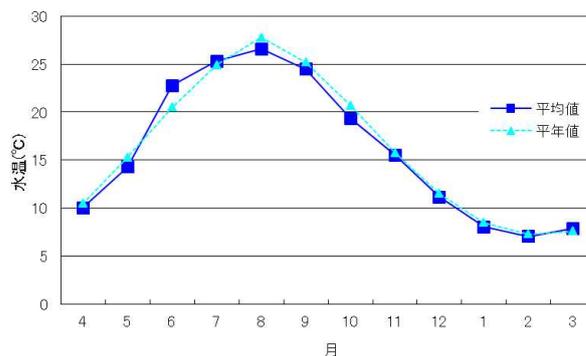


図2 5 定点表層(0.5m)の水温平均値と平年値の経月変化

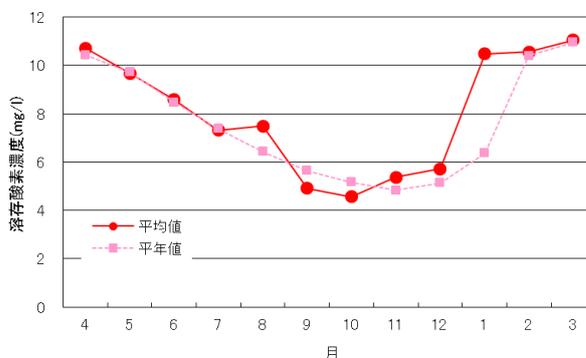


図3 Stn. IV底層(水深約80m)の溶存酸素濃度と平年値の経月変化